

短 報

シマサクラガンピ (山中二男)

Tsugiwo YAMANAKA: Notes on *Diplomorpha pauciflora* var. *yakusimensis*

前報 (植研 68: 124-126, 1993) でくわしく述べたように、四国にあるサクラガンピの類は、変異が多い。そのため、いちおう断定を避けたが、サクラガンピと考えるより、シマサクラガンピと見なすのが妥当のようである。ただ、サクラガンピとの違いは、やはり種として区別するほどのものではないと思う。

したがってここでは、以前は九州だけに知られていたシマサクラガンピが、四国の徳島県と高知県にもあり、あわせてそれをサクラガンピの変種とする見解を、あらためて明らかにしておく。

なお、ガンピ、サクラガンピなどは、*Wikstroemia* に入れられることが多いが、液果で萼筒が裂けて落ちる常緑のアオガンピ類とは異なり、乾果が多くは宿存する萼筒に包まれる落葉性の木である。その他の形質の違いも考慮すると、ガンピ属は *Diplomorpha* とするのが適切と思うので、それにしたがってシマサクラガンピの学名を変更す

る。ここで取り上げなかった異名は、原 寛 1954: 日本種子植物集覧第三冊 235 を、その他の文献は前報 (山中 1993) を参照されたい。

この報文を書くため、ご指示くださった山崎敬博士にあつく感謝する。

***Diplomorpha pauciflora* (Franch. et Savat.) Nakai var. *yakusimensis* (Makino) Yamanaka, comb. nov.**

Wikstroemia pauciflora Franch. et Savat. var. *yakusimensis* Makino in Bot. Mag. Tokyo 24: 52 (1910)

Diplomorpha sikokumontana Akasawa in Bull. Kochi Wom. Univ. Nat. Sci. 25: 4 (1977), syn. nov.

Distr. Kyushu and Shikoku (Pref. Tokushima and Pref. Kochi)

(高知市 XXXXXXXXXX)

追 悼

巨理俊次先生を偲ぶ

Professor Dr. Shunji WATARI 1906-1993

本誌ともご縁の深かった巨理俊次先生が突然お亡くなりになったとの知らせが、1993年7月17日の早朝にご遺族から入った。先生は1906年6月10日のお生まれであるから、87才であった。平均寿命を越えたとはいえ、近いうちに写真を主とした植物形態学の本を出版しようと準備をなさるなど、まだまだ後輩たちのためにご活躍だけそうなご様子を知っていた者としては、驚きに打たれた。筆者らは、1960年代に東大理学部植物学教室で先生の門下生となって以来、公私ともに一方ならぬお世話になって来たので、ここに先生の追悼文を書かせていただきたい。

先生は1932年東大理学部ご卒業ののち、副手から助手、講師、助教授を経て、1967年に教授として定年を迎えられるまで東大理学部植物学教室に勤務され、その後は、前年から併任となっていた千葉大学で、1972年まで教授として勤務された。その間の業績は多岐にわたるが、初期にはマメ科、ユキノシタ科、カエデ科の葉柄の解剖がある。並はずれた器用さをもってはじめて可能と思われる労作で、半世紀以上を隔てて、なお引用されている。その後は、第三紀の珪化木など化石木材を主とする木材解剖学が中心となり、日本各地から得られた石化化石を次々と研究され、多くの新種を記載された。先生の研究生活の主要な時期は戦中戦後の混乱期であったため、今日では想



The late Professor Dr. Shunji WATARI (1906–1993)

像もし難いような物心両面のご苦労があったに違いない、この時代に学問を守り抜いてくださったお蔭を、植物形態学や古植物学を志す後輩たちは蒙っている。

そのほかに、ご自身は道楽とおっしゃりながら、おびただしい数の植物写真を撮影されたことも、大きな貢献であった。先生の器用さは撮影においても遺憾なく発揮され、しかも一般のカメラマンと違って植物の勘所をおさえて撮られた写真は、多くの植物学的情報を担うものとなった。全6巻の写真集「植物」(第一法規, 1961–1964)は、デザイナー等からは芸術写真集として見られたが、植物形態学を学ぶものにとってはその教科書であ

る。小倉謙先生や原寛先生などの著作にも先生の写真は多く使われたし、写真を載せている植物図鑑や百科事典の類では、先生から取材せずに出版されたものはほとんどないに近い。

先生があまりにも楽しそうに撮影されるお姿に惹かれて筆者らもカメラを持ち歩くようになり、研究材料採集という口実を作っては野外に出た。先生のゼンザブロニカをはじめ何台ものカメラを車に積んで、中軽井沢の別荘にお邪魔したこともしばしばあり、いつも助手席がお気に入りだった。本当はご自分の運転で自由な撮影旅行がなされたいご様子であったが、別荘の敷地内での数メートルの運転で立木に衝突して免許取得は諦められた。

先生はお若いころからいくつかの持病がおりで、その一つに「オオシカン閉塞」というのがあった。エウスタキオ管を欧氏管と呼んだ時代の病名である。低気圧が近づくと、このために中耳と外界の気圧に差ができて頭が痛くなると先生はおっしゃる。なぜか先生の「オオシカン閉塞」にはビールが特効薬で、症状が出始めると「ビールでも一杯」と夕食に誘ってくださる。天気が悪化はうれしくないが、雲行きが変わると弟子どもは「ビールでも一杯」を密かに期待し、マイクロームの手順を早めに切りあげる準備をしたものであった。行先は本郷だけでなく神保町や銀座にまで及んだが、決して新しい店を開拓することはなく、いずれも先生の古くからおなじみの店であった。

これは、一つのことを長い年月にわたって研究なさったこととも符合する。その典型的なあらわれが「芝棟」(八坂書房, 1991)の出版である。

新刊

□堀 輝三編：藻類の生活史集成 第二巻 褐藻、紅藻類 xix+345 pp.+51 pp. 1993 内田老鶴圃, 東京. ¥8,240. 同上 第三巻 単細胞性, 鞭毛藻類 xvii+313 pp.+62 pp. 1993 同上. ¥7,210.

良く知られているように、藻類は体制は単純であるが、生活環は複雑である。例えば、緑藻には生活環の基本となるタイプは少なくとも5つはあり、褐藻には4つある。そして紅藻には3つはある。それらを環境とのかかわりで見ると、さらに複雑となる。藻類全般にわたって生活史の全貌を把握するのは容易でない。

藻類を材料にして細胞構造の研究を行っている編者は、生活史や生活環を知ることが、藻に対する理解の基本として必須であるとして、藻の生き方や一生を知りたい人々のために、500余種を選び編纂したと言う。第二巻には171種が47名により、第三巻は146種が32名により、それぞれ生活史の図解と記述がされている。なお、第一巻は緑色藻類で185種を含み、1994年内に刊行予定の由である(定価8,240円)。いずれもB5判の

わら屋根の棟にイワヒバ、イチハツ等を植えて固めとする様式に関する著作で、全く類書がなく、建築史学や民俗学などの人達からも絶賛を得ている。少年時代に東京近郊で見たのが興味の発端で、それ以来折にふれて記録を続けられたが、退官までは本腰を入れて調査する余裕がなかったとおっしゃり、その後、奥様の運転で各地を精力的に探訪して得られた膨大な資料を整理して出版されたものであるから、この著作にはおよそ4分の3世紀の年月がかかっている。

このような大仕事を成し遂げられて、急に老け込んでしまわれるかと心配する声もあったが、先述のとおり次の著作に意欲を燃やしておられ、大いに期待していたところ、突然の訃報に接した。晩年の先生を悩ませ続けた帯状疱疹の痛さから解放されて、苦しみのない世界へ旅立たれた先生は、天国でどんな写真を撮っていらっしゃるのだろうか。(福田泰二・杉山明子)

見開き左側のページ一杯に生活史の図を掲載し、対面ページに(I)参考、関連文献(II)生活史、生活環の解説、問題点その他(III)採集方法、利用状況、培養法など、及び(IV)英語による図の説明を記述している。内容は視覚により容易に理解出来るので、必要に応じて見るほかに、暇な時に時間にまかせてページをめくるのもよい。専門家だけでなく、広く藻類に興味をもつ人は座右におくと便利であろう。学校や研究所の図書館にも備えたい書物である。一つ気になることは、当該種や近縁種で核相が未だ明かでない種にRD, n, 2nなどの記号があったり、明かな種になかったりの点である。助言に、“未知であろう…その現状を示すとともに…次代に引き継ぐ問題の提示をも心がけた”とあるだけに、改訂の際の一考が望まれる。(千原光雄)

□川嶋昭二編著：日本産コンブ類図鑑 8 pp.+214 pp. 1989. 北日本海洋センター. ¥13,000. 同上改訂普及版 xxvii+206 pp. 1993. 北日本海洋センター. ¥4,800.

コンブ科植物は、日本では、特に北海道沿岸を